

## 「カーミージー周辺の海をみんなで保全・活用するための地域円卓会議」報告書

2017年12月3日(日) 13:30~16:00 浦添市立港川小学校 地域連携室  
着席者：銘苅全郎、鹿谷麻夕、下地節於、笹尾修司、銘苅 健、伊禮由紀子  
司会：平良斗星 記録：宮道喜一  
主催：うらそえ里浜ネットワーク 協賛：浦添市港川自治会  
協力：まちなか研究所わくわく、 みらいファンド沖縄  
参加者：約60名

### ● 論点提供：銘苅全郎（港川自治会 会長）

- ・10年前、里浜フォーラムで里浜宣言を採択した。その3年前から、自治会では里浜活動を行っていた。
- ・昔のカーミージーは、遊んだり、食べるものを採ったりした所。生活の中で海が使われていた。  
現代の暮らしにかなう形で、普段の生活で使える海にしていこうという活動が里浜活動。
  - 海の体験 → 資源を獲ってしまう追い込み漁から、毎年たくさん生えるアーサの利用へ。
  - 環境学習 → 港川小学校と連携して、10年以上続けている。
- ・自治会としては、地域づくりの視点を大事なこととして、海を活かしていく。  
生き物が減り、獲って食べる活動を自粛。カヌー活動、アーサ採り、自然観察会などの海の利用へ。
- ・西海岸開発計画は計画が遅れ、小学生のカーミージー探検隊からイノーを残す要請につながり、埋め立て予定が橋になった。国の事業（予算増）に市も対応し、イノーは残していこうということになった。
- ・里浜条例の目的は、「市民の海」として残していこうということ。  
西海岸開発計画が遅れた時の利、基地に隠れてイノーが残った地の利、地域住民・海の専門家・学校の先生・行政担当者など人の利。この3つの利により今のカーミージーの海がある。

### ● 鹿谷麻夕（しかたに自然案内、自然ガイド／環境教育）

- ・沖縄の西海岸は、糸満～那覇～読谷にかけて、自然海岸はほぼ残ってない。たとえ小さい浜が点々と残っていても、元の自然とは言えない。これは、海岸に人工構造物ができると周囲の環境も変わるから。まともな面積（1 km × 3 km）の自然海岸が残っているのはキンザー沖だけで、都市に隣接して自然海岸が残ってるのは世界的に珍しく、貴重である。
- ・海草（うみくさ）の藻場があり、その沖にはアーサの生える岩場やサンゴもある。日本全国、海草藻場はほとんど埋め立てられて無くなったため、海草はみんな準絶滅危惧種。
- ・水深が浅い海草藻場のイノーは、子供達が歩いて安全に観察しやすく、価値がある。
- ・里浜（国交省）とは、人が使い手入れして維持される海で、地元のみんが暮らしで利用する海のこと。
- ・埋め立て計画が後退して、道路は橋となって海が残ったが、橋が開通すると多くの人目に触れ、いろんなレジャーが入ってくる。宜野湾マリーナからエンジン付きボートが乗り入れ、同じ所で幼児づれの親子も泳いでいるので、レジャーの住み分けが必要。
- ・生物が激減している中での保全のありかたを考える必要がある（例：3年採取禁止とか）。
- ・自然保護は、実際には、専門家や環境省や行政だけではできない。究極的には、住んでる地元の人しか海の環境変化はわからない。このため、地域発の守る取り組みを続けていく仕組みを作ることで、何十年も保全を続けていけるだろう。例えば、石垣島の白保には自主ルールがあり、地先のサンゴ礁を守っている。港川ならではのルールや人材を作っていく必要がある。

● 下地節於（浦添市企画部 部長、 国や市の政策のマネジメント）

- ・浦添市の里浜条例は、正式には「浦添市里浜の保全及び活用の促進に関する条例」。12月1日に議案76号を提案し、一般質問を経て審議し、12月20日可決予定。
- ・理念条例であり、里浜の保全・活用を、行政も市民といっしょに取り組むことを明記してある。利用ルール作りはこれからスタートし、どう作るか、どんなルールを作るのかは、まだこれからである。
- ・これまでは上から目線だったが、官と民が一緒に取り組むことは歓迎すべきこと。これからは官と民が一緒になってやっていく流れなので、円卓会議の提案を使って利用ルールを一緒に作り上げたい。
- ・里浜条例ができることにより、里浜を守るための予算化の根拠ができる。
- ・埋め立て範囲が小さくなったのは、港川自治会が海を利活用してきた、地域の小さな取り組みが今につながって国を動かした結果。この条例が動き出したのは、港川自治会による環境学習などの利活用の実践が、大きな後押しとなった。このように、小さくてもやり続けている事実が重要。

● 笹尾修司（笹尾商工（株）会長、NEOS／アウトドアショップ）

- ・沖縄の人は、海遊びをあまりしないと聞いていた。自然体験を通して、親子のふれあいや地域活性化を目指している。
- ・浦添の小5の子供達は、東村のキャンプ場で自然体験を行っている。浦添には、子供が海の自然に親しめる場がないので、以前は玉城の海に行っていた。カーミージャーは、貴重な地元の海。
- ・カヌーを操れば、風と波を感じることで自立心が芽生え、子供の豊かな心を育むことにつながる。また、自然観察やシューノーケリングでは、海の中の体験はその人だけの個人的な体験として残る。
- ・沖縄の観光は、平和学習から環境学習に視点が移っている。マングローブのある東村は、カヌーで多くの雇用が生まれた。浦添市には観光地がないと言われるが、新たなサンエー・パルコ前も含めたイノーでは、カヌー体験の可能性がある。県外・海外からの観光客の増加や、生物保全の観点から、利用ルールと指導者の育成が必要。

● 銘苅 健（港川小学校 校長、港川出身）

- ・地元の人として、自治会長と共に、港川の子供達がカーミージャーに接する活動を行ってきた。今の子供達は、きっかけや仕掛けがないと、足元の魅力に気づきにくい。
- ・地域の宝物であるカーミージャー（教育資源・浦添の宝物）で遊ぶことで、地域に誇りを持つことができ、外部に発信できる自信を持たせることができる。将来、港川に戻ってくることを見据えて活動している。
- ・4年生は、総合的な学習の時間に、地域の散策（歴史）→カーミージャー探検隊（海の生物・大切さ）→ごみ（環境教育）→アーサ（地元の恵み、食育）と、年間を通して立体的な取り組みを行っている。
- ・カーミージャー探検隊では、事前学習→海でカーミージャー探検→事後学習→新聞作り→3年生に向け発表を行い、次年度の後輩たちにつなげている。この授業は大学生になっても覚えており、県外の大学で、自分の地域の誇りとなっている。
- ・市の宝物であり、市教育委員会が広く活用することで、市内の小学校も利用できる。
- ・港川小学校では、全職員がカーミージャーでの地域体験学習に参加しており、校区の6自治会に先生がおりていくことで、教師が地域を学ぶ機会を広げている。

● 伊禮由紀子（沖縄タイムス 記者）

- ・小さい時は、カーミージーで普通に遊んでいた。でも、自分の足元の宝に気づかないまま、埋め立て計画の傍観者だった。自治会の活動がなかったら既になくなってしまった海だと思えば、取材しながら反省。
- ・マスコミとしての里浜条例の意味・価値は、地元による十数年の自発的な活動が、行政・国を動かしたこと。これは大きなニュースバリュー（価値）があり、社内を説得して一面トップ記事となった。地域が、要請ではなく、行動で示したことに価値がある。
- ・カーミージーの里浜活動は、協働のまちづくりの理想のモデルであり、全県へメッセージを発信したい。今後の活動の広がりを期待している。

■ サブセッション（参加者による話し合い）の意見発表（グループ3つのみ）

- ① カーミージーの海は、宜野湾など近隣とは使い勝手が異なる。宜野湾は若者向け、那覇はバーベキューなど、しかし浦添は自然学習に向いてる。差別化のために、地域の中でのルール作りが必要。
- ② 関係者の中央に共通の目的をもってくると、それぞれの得意技で物事を動かしやすい。保全目的の中心にアーサを置いて、商品開発して、守るための資本とすると、面白い展開になりそう。周知することで興味を持ち、足を運ぶ事で自分ごとになり、共感者が増え、みんなが守る立場になれば、他の地域のいいモデルになる。
- ③ 昔はタマンがたくさん釣れた。ごみもあつたが自然が豊富だった。橋ができれば人が増える。何か手をうっておかなければ、ごみが捨てられ、バーベキューで汚されるだろう。例えば、利用料金をとる、ごみを拾ってくれば入場料になるなど、海を守るためにみんなでアイデアを出し合っていきたい。

◎セッション2 港川の家から、みんなの家へ（着席者による、今後考えるべきこと）

- ・スケジュールとしては、2018年4月に道路開通。年度内にルールを一度文章化して、発信する。そのために、ルールを見直して行く仕組みと、作業メンバーを決める。一度は環境調査を行う。
- ・保全のためには、モニタリング（継続的な環境調査）が必要。日々の観察の中で見えてくる事の重要性の認識。日々、海を使っている人の感覚が重要であるし、専門家による環境調査も必要。
- ・市民がだれでも自由に使う海として、保全との兼ね合いを検討。現状では、使った後のごみの問題。経済価値を見出していく例としてアーサを活用し、自然を使った経済振興は埋め立てより有効だ!!という認識を広める。同時に、利用ルールの発信。
- ・リゾートホテルができるので、観光との両立を考える。
- ・海浜公園のカーミージーへのルート確保は、ホテルと調整中。管理は指定管理者制度。拠点施設への市民の参加を促す方法。
- ・里浜はただの保全区ではない。使いたいならどんな使い方をしたいか、まずは意見を出す。使い続けるには、エリアを分けたり人数制限などが必要。
- ・50年後も持続的に使っていくには、ルールを地域で作るのが基本。県のカヌー業者は、事故防止のため県への申請が必要で、講習会や検定会がある。

● 平良斗星（司会、みらいファンド沖縄）まとめのアドバイス

- ・様々な専門家が寄り添うことの重要性を認識した。先進事例が少ないので、利用による海の変化をモニタリングにより評価し、自らを変えていける対応力の高いルールづくりが大事。自然活用で価値が発生する例は沖縄では少ないので、今日の参加者の持続的な参加が必要。

## サブセッションのメモ (10グループ)

### ■ 利になりすぎて。海の使い方が大事。

- ・こどもたちに経験させてやるのが大事。
- ・観光客が入りすぎる。
- ・ルールづくりが大事かなと思う。
- ・H29年度はルール作り、アウトラインを作成。
- ・2～3年を目処に、基本ルール、実施ルールにつなげていく 継続する取り組みを。
- ・“One Ocean” 海はつながっている！
- ・浦添市の西海岸は1つ（同じ海）として捉えるルール作りが必要。

### ■ 道路 → すごく人が来そう。

- ・つり人のごみ。
- ・海をきれいに使う。
- ・つりとカヌーの住み分け。
- ・宜野湾マリナーナからダイビング 利用協定あり。  
カーミージーの海でお客さんが休憩。  
ごみ拾いしてもらっている 餌付けの禁止。  
カーミージーの海にブイがおいてある。
- ・カーミージーのまわりは、マニア向けダイビングスポット。
- ・小学生がもっと活用できる海 今の子供達は港川をよく知っている。
- ・地元の人・カーミージーが誇り案内したがる。
- ・過去に基地から汚染 大丈夫？

### ■ 昔は橋はなかった。

- ・カーミージーの後ろ カフェ。  
ジェットスキーが来てカヌー揺れる。  
子どもがあぶない事があった。
- ・ごみひろい。
- ・子どもがあそべる環境。
- ・看板があった方がよい。
- ・シュノーケルでよく見れる。
- ・サンゴ礁に入らないように、ある程度の制約が必要。
- ・市民が自由に使う — 保全（大事に使う）  
→ すみわけが必要。
- ・恩納村 海岸保全条例。
- ・経済化 産業 シーグラス。

### ■ 西海岸開発と自然維持。

- ・里浜 残された自然。
- ・キンザーのお陰で自然が残った。
- ・これからは港川の地域に密着した環境と自然。
- ・今後、海を護る、ルールづくり。
- ・出来るだけ海を残す： 浦添軍港の必要性もわかるが、出来るだけ海を残す。
- ・軍港は活用する。
- ・海は、自然は、4～5年放っておけば豊かな海に戻る。そこで、ルール作りが必要。
- ・自然の水族館である： カーミージー公園が出来たら、マリンランドを作る。  
(水族館も含めて?)
- ・沖縄の海も世界の自然遺産である。

### ■ 当事者の意識。

- ・条例を作った時の「気持ち」 → 10年後。
- ・ルールがゆるいと、後々厳しくするのは大変。
- ・不便にする。
- ・子供達の教育・自然体験が、自然を守ることになる。

### ■ ルール作り 重要

- ・観光客（や県内）と、地元の利用の仕方  
→ 制限の仕方 ・ジェットスキー
- ・中心になる（自治会、他）  
(管理的すぎず) (漫湖公園みたいな)

### ■ 以前はイセエビも採れた。

- ・ホテル進出に伴い、レジャー（マリンスポーツ）が多くなり → 海の保全に対して？
- ・これまでの歴史とこれからの未来がある。  
過去の歴史も記載する必要がある！
- ・ごみの問題 → 活用と（保全も重要である）  
→ 観光 → 現状維持 → 開発？

■ 自然を残す形で開発していく

- ・少し、目的がちがうが、防災という視点から、サンゴ礁がつくるリーフ、広いイノーがあるが為に、津波、台風、季節風から、私達住民を大きく守っているということ。
- ・例えば、南太平洋のニューカレドニア（私は船乗りとしてよく行った）あたりは、サイクロンがよくあるも、意外と被害が少ないのは、サンゴ礁が発達しているから。

■ 環境：新しい形の、経済の、循環が必要では？

- ・エコ：→ エコロジー エコノミー。
- ・アーサを新しい産業として取り入れられないか。
- ・企業、クリエイター、行政、地域。
- ・開発を導線として利用。
- ・共感者を増やし、つなげていく。
- ・生産性を高めながら 活用。

■ 海岸利用のイメージ図 →

・那覇

- 大型の船。
- うみそら公園→BBQ、ビーチ小さい
- ペットボトルが捨てられる。
- ごみ（ポイ捨て多い）。
- ペット遺棄、ごみ活動、暴走車
- ↑ルール内に対策必要？

・浦添

- 自然多い、いいところ（ゆったり、自然）。
- 大公園 湧き水 海 自然。
- キンザーに電車の倉庫などあるといいな。

那覇←浦添始発→宜野湾

- 宜野湾・那覇にホテルが多く、どちらもアクセスしやすい。

- 宜野湾・那覇は、20代向けのレジャーや観光でも似ている。浦添は、子供でも、年寄りでも、ゆったりできるので、

那覇・宜野湾から遊びに来られる（利点）。

- 那覇や宜野湾のようなリゾートではなく、地域性や自然をウリにするべき。

・宜野湾

- ホテル多い コンベンション マリーナ
- 20代、少し激しいレジャー、船、イベント
- ペットが捨てられる。
- 暴走車多い。
- ごみ（ポイ捨て多い）。

